

# 子どもの学習成果につながる教師行動の追究

## —子どもの技能レベルに応じた教師のフィードバックに着目して—

岩田 菜緒 (群馬大学大学院・授業実践開発コース)

### 1. 目的

本研究の目的は、子どもの技能レベル(上位群・中位群・下位群)に応じた教師のフィードバックの特徴を明らかにし、子どもの学習成果につながる教師行動について追求することである。

### 2. 研究方法

- 1) 対象:小学校1年生2クラス(A教師:筆者担当クラス、B教師:保健体育免許保有の熟練教師のクラス)
- 2) 単元:ボール投げゲーム(7時間)
- 3) 調査時期:2022年10月13日~11月1日
- 4) 分析方法:①単元4-7時間目のメインゲームにおける状況判断の適切率の変容、②教師行動観察法(高橋ら、1991)を用いて教師のフィードバックの分析

### 3. 結果と考察

- 1) ゲーム中の状況判断の適切率:単元4時間目と7時間目を分析した結果、2クラスの3群いずれも7時間目は8割以上であった。対応のあるt検定の結果、A教師のクラスは、上・中位群の適切率は維持、下位群は有意に向上した。一方、B教師のクラスは上位群の適切率は維持、中・下位群は有意に向上した。
- 2) 技能レベルごとにみた1授業あたりの教師のフィードバックの平均回数:A教師は上・下位群が4.6回、中位群が5.6回であった。時間ごとにみると、上位群は3時間目、下位群は2時間目、中位群は5時間目以降に多かった。一方、B教師は上・中位群が2.9回、下位群が4.5回であり、多くの時間において下位群に対して多かった。
- 3) 教師ごとにみたフィードバック内容の特徴(表1):2名の教師ともに、どの群に対してもできていることや挑戦していることを認め、肯定的な雰囲気を作っていた。加えて、A教師は励ましの割合も多く、児童の学習意欲向上を図っていた。矯正については、B教師の方が多く、児童の課題を見抜いて即座に声をかけていた。特に、下位群に対する矯正をみると、A教師は声のみが多かったが、B教師は声と動作によっ

てフィードバックを行ったことで、児童が動きの改善点を理解しやすかったと考えられる。

表1 教師ごとにみたフィードバック内容の特徴について

	A教師	B教師
肯定的フィードバック	約5割+励まし	約7割
矯正フィードバック	少ない	多い
上・中位群への関わり	できていることへの賞賛	
下位群への関わり	できるようになるまで 声のみ 単元前半に多い	できるようになるまで 声+動作 単元を通して継続的

4) A教師の関わり:ボールを投げる際、足が先に出ていた児童Aがいた。同グループの児童Bのよい動きに対し「今のBさん見た?(足を)出すタイミングが素晴らしいかった」とグループに対してフィードバックを行った。それを聞いていた児童Aは、足を出しながらボールを投げようと動きを修正している様子が見られた。このように、運動を見ている児童を含めてよい動きを共有することで、目指す動きが広がっていった。また、目指す動きができるようになるまで教師が関わり、肯定的なフィードバックを行うことで「自分の動きはよい動きだ」と自己認識し、運動に対する自信につながると考えられる。メインゲームでは教師がボール拾いの児童と一緒によい動きを賞賛したり、励ましを行うことで、運動を見ている児童が「こっちだよ!」と声をかけ、拍手をして喜ぶ様子が見られた。教師がこのような姿勢を示すことで、児童同士の関わりに広がっていくと考えられる。

### 4. 結論

2名の教師のフィードバック比較より、個々の児童の困り感を見抜き、声と動作による矯正・具体的フィードバックを行いつつ、学習意欲の向上のため励ましを積極的に行うことが大切であると考えられる。

### 5. 主な参考文献

- 1) 有坂萌・鬼澤陽子・川田喜規(2019)フラッグフットボール単元における技能成果につながる教師のフィードバックの検討,スポーツ教育学研究,39(1),pp19-31.